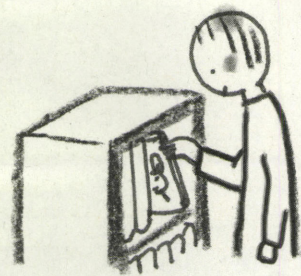


## 私より幸せになれ

松井るり子



### ●母の賢さを知れ

風が冷たいから、手袋をして行きなさいと言うのに、自転車通学の高校生の息子は、「いらーん」と突っぱねて家を出て行きました。その背中に向かって、「そうだよね。冷え症オバサンと違って、若いんだから平気だよね。平気だといいいね」と思う私と、「何を言うか。いまはよくても、学校まで四十分も自転車で乗ったら、風で冷え切ることがわからんか。今回わかって、『自分は間違った、未熟だっ

た、考えが甘かった。正しいのは御母上だった」と思い知るんだねっ」と思う私と、両方います。

「これが呪いだ！」とハッと気づいて、ひるみます。わが子に呪いをかけるなんて、あり得ないと思っていたのに、ほんやりしていると、こんなふうになってしまふと知り、愕然としました。

母親が息子を呪う話なら、知っています。ジェームズ・リーブズ著 中野好夫 谷村まち子訳「金のたばこ入れのふしぎ」(『オクスフォード世界の民話と伝説1イギリス編1』に収録 講談社 品切れ)

むかしむかし、深い森の中に貧しいきこり夫婦と、一人息子のジャックが住んでいました。大きく

なった息子は、世の中へ出ていきたいと思い、母親に許しを請います。「いいとも」と、母親は言いました。「食べものをいろいろ用意してあげるから、すぐにでかけなさい。小さなおかしでも、おまえがしあわせになるようにという、かあさんのいのりがかもつているほうがいいか、それとも、かあさんののろわれても、大きなおかしを持っていきたいか、どっちだね」

マザーグースの「かあさん泳ぎに行つていい?」にも似ていますね。「もちろんいいわよ、かわいい子」に続く、機嫌のよいお答えの結びは「でも決して水には近づかぬこと」でした。まったくもう、どこが「もちろんいい」んですか? でもね、このかあさんの気持ちは、いまになると、よくわかるのです。子どもを外に出す母親の心配そのものです。

### ● 呪いと言祝ことばぎ

ジャックの母親も、「いいとも」と機嫌よさそうに即答をしたわりには、妙なことを言い出します。小さいお菓子を「祈り」と、大きいお菓子を「呪い」とくつつけて、さあ選べと差し出したのです。子どものころの私には、彼女への批判はありませんでした。親の言うことは天災のようなもので変えられず、受け入れるしかありません。せめてこの子に私の考えをカンニングさせてやろうと念じながら読みます。大きいやつはダメだジャック。三人きょうだいのこういう話だと、上二人が大きいお菓子で失敗、末息子が小さいお菓子で成功と、筋書きは決まっているでしょう。あんたは一人っ子だから、最初からうまくやらなくちゃ!

私がそう言っているのに、ジャックは聞きません。「それなら、大きいおかしをください。道が遠いか



ら、とちゆうで、おなががすくといけませんから」  
ですつて。ああ、もう知らん。

いまになってみると、老母がわざとけちくさい質問を出したのは、息子を混乱させて、旅立ちをちよつとでも遅らせたかったためかなと思います。そんな小細工を、息子が「馬鹿らしい」と振り切るかのごとく、母の呪いもなんのその、自分の食欲を最優先しているところが、健全な頼もしさに思えます。

私も子どもにあれこれ言うのと並行して、「こんな母なんか、本気で相手しなくていいからね」と思っているところも、あつたかもしれません。弱気な私と比べて、ジャックの母は、憎まれ口ともいえる息子の選択、呪いつきでいいから大きなお菓子をよこせという回答に、負けていません。望みどおりの大きなお菓子をやって息子に別れを告げると、「やねにのぼって、むすこが見えなくなるまで見おくり、のろいつづけました。(うちのジャックは、

年とつた母親をのこしていく、親不孝なむすこです。やさしい心のない子には、ふしあわせと大きな苦勞がつきまといますように!」

息子と別れた後に、わざわざ屋根に登って、姿が見えなくなるまで、ほんとに呪うなんて。こんな人、変質者だわ。全然わからん。キライと子どものころは思いました。そのくせ自分が老母のお年頃になつてみると、私も子どもに同じことをしているのです。そうと気づいてあわてて「呪い修正のお祈り」なんかをつけたしながら、自分がまた一歩ジャックの母に近づいたことを、苦々しく思うのです。

こういう母親をもつたにもかかわらず、最後にはジャックが伴侶を得て、幸せになるのが救いです。必ずしも、賢母でないと子どもに福が授からないわけではないみたいです。本当によかったです。

となると、うちの息子たちが時々とつてくれる「カンケーねーよ」みたいな腹立つ態度が、頼もしく



さえ思えてきます。愚かな母の「子どもが心配」「自分が寂しい」「時が経つのは切ない」「私から離れてどこか行ってほしくない」などの、天真爛漫な心もちは、もってもしいけれど、本来、自分の中で処理すべきことです。その気持ちの裏返しですが、つい呪いとなって口から出てしまっても、子どもは蚊取り線香の灰ぐらいに「うぜえ」と思つて振り払つて、自分の道を進むことでしょう。ありがたいです。

この話にはもう出てこないジャックの母は、息子を呪つたことで、大きな印象を残したのは確かです。これはこれでなかなかのやり方だったかもしれないませんが、自分のこととして考えると、子どもの人生から呪いで退場だなんて、悲しすぎます。どうせなら芥川龍之介『老いたる素戔嗚尊（スサノオ）』のような、言祝ぎで退場したいです。スサノオは、無理難題をふっかけて追い払おうとした婿殿が、娘をさらつていくのを、「おれよりもつと仕合せになれ！」と、

祝福で見送りました。

「呪い」と「祝い」の違いは、漢字でもほんのちよつとですしね。ジャックのお母さんもここでもうちよつと頭を働かせたら、呪いたいほど悲しかったのは、親の役目の終焉しゆうえんと、自分の老いと、やがて来るこの世からの退場であるとして、離れ行く息子とは、分けて考えられたはずです。

ぼんやりしていると、そこを分けて考えられないでしよ？ と教えてくれる、「金のたばこ入れのふしぎ」は、怖くて、大事な話です。

### ●「わけえの、はたらくんだ」

小さかった子どもたちは、お話に出てくる「悪いやつ」が大好きでした。たとえば、ジャック・ガントス作 ニコール・ルーベル絵『あくたれラルフ』

（いしいももこ訳 福音館書店・童話館出版）

あくたれねこのラルフは、飼い主セイラの人形の



首をむしり、セイラの乗ったブランコの下がついてい  
る木の枝を切り落とし、テーブルのクッキーをどれ  
も一口ずつかじり、自転車でテーブルに突っ込み、  
鳥を追いかけ回します。全部全部、小さな良い子の  
あこがれの遊びです。自分ではやりません。絵本の  
中の悪い子にやってもらつてにんまりです。

このあたりまでのラルフは、渋い顔のおしかりを  
受けるくらいですみましたが、家族で見物したサー  
カスでひどい妨害をした時には、とうとう愛想をつ  
かされ、置き去りにされました。ラルフは容赦な  
く、サーカスの最底辺の仕事にこき使われます。ナ  
イフ投げの的になるのを断ると「おい、わけえの、  
ここじゃ、だれでもみんな、はたらくんだ」と、檻おり  
に放り込まれます。いいせりふです。うちのわけえ  
のにも、家にいる間にもっと働かせておくんだつた  
なーと、このキツパリがうらやましいです。

サーカスの食事はひどくて、すっかりスリムに

なったラルフは、檻をす  
り抜けて逃げ出しました  
が、町も甘くありません。  
やくざねこはいるわ  
「なまごみねつ」にかかる  
わで、寂しくなつて泣き

出しました。ちようどそこに、飼い主のセイラがラ  
ルフを探しにきて、無事帰宅。以後よいねこを志し  
ますが、ロブスターがお皿に載つた時だけは、どう  
しても我慢できずに「あくたれてしまふのでした」。

ラルフをサーカスに置いてくる時、セイラは大粒  
の涙をこぼしています。セイラはラルフに愛想をつ  
かしたのではなかつたのでしょうか。つかしまし  
た。それでも泣けてしまふのです。心と頭の分離  
は、いつだつてこんなふうに苦しいのです。他人事  
とは思えません。

しばらく帰省していた末っ子が、新学期に備えて





寮に帰って行つた後、私の砂時計の砂が、がさーつと音を立てて一挙に落ちてしまった気がして息苦しくなり、「何だこれは。おかしい。鬱か。更年期か」と言いながら、家の中をうろろと歩き回りました。一時間で治りました。ヒステリーでしょう。

セイラが苦しい思いに耐えて、ラルフを断固家から出したことは、あくたれ矯正によく効きました。しかも依然としてあくたれの余地が一点残っているところが、絶妙によいです。いつもこんなふうには、うまく行くといいですね。悪くすれば、あくたれる舞台を、家から外に安易に移した罰として、目玉が飛び出るような請求書つきで帰ってくる。あるいはこわいお兄さんたちが、背後にゾロゾロついてくる。あるいは「なまごみねつ」で、のたれ死ぬ。などなど、いろいろと悪いことばかり想像してしまいます。いまのところ自分が知らない苦労よりは、いま見えている苦労のほうがましかもしれないという理由で、現

状維持という結果になってしまふのでした。ずうたいのでかい子どもの教育は難しすぎます。

まだちゃんとしつげができていないのに、うっかり手放してしまつた気がします。「ええ子なんですけどねー」という言い訳はありますが、それで通用するほど世間が甘いとも思っていないません。なのに、こうなつてしまつて、ごめんよ、ごめんよと思つています。あとはもう、自分で自分を育てるしかないのでしょうか。

それを言えば私も同じです。いまの私に必要なことからやつてきたんだなと思つた映画を、最後に挙げておきます。

「マルセルのお城」「オールアバウトマイマザー」「ヘヴン」「クークーシユカ ラップランドの妖精」。ぜひどうぞ。

(文筆業)

\*この連載は今回で終了いたします。